

アフターコロナの開始 ：日本らしい落としどころ

帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授

福田 吉 治

2020年1月から3年以上にわたり人々と社会を苦しめた新型コロナウイルスも、2023年5月8日、感染症法の5類に移行となり、アフターコロナの時代に入りました。公衆衛生の世界に身を置いている私としては、これを機に一言コメントしないわけにはいかないように思います。議論すべきことはたくさんありますが、ここでは、二つの点（5類移行と感染対策緩和）について考えてみます。

◆感染症法上の分類移行時期

まず、一つ目は感染症法の2類相当から5類に移行する時期が適切だったのかという点です。

感染者の自宅等での待機や医療機関での療養、濃厚接触者の同定やフォローなど、2類相当の対応はとうに難しくなっていました。一方、公衆衛生の専門家の中では、感染力や重症化の点で、季節性インフルエンザのような他の5類と一緒ににはできないという意見は多くありました。また、5類に移行しようと思うと次の流行の波が来るなど、移行のタイミングは悩ましいところでした。

中国の影響は大きかったかもしれませんが。昨年末、ゼロコロナからウィズコロナに政策転換し、感染者は急増したものの（正確な感染者数や死者数は不明）、経済は復調し、国外への旅行者が一気に増加しました。そんな中で、日本がこれ以上5類移行を先延ばしにすることは難しい状況だったでしょう。

◆今後の感染症対策

もう一つの感染対策緩和の点では、個人がマスク着用を含めて、感染対策をどの程度行うかです。多くの国で早くからマスク着用もしなくなり、通常の生活に戻っていました。海外から見ると、依然としては全員がマスクを着用している日本の状況は異様に感じられたことでしょう。日本でもマスク着用などの感染対策の緩和をより早期に推奨してもよかったのかもしれない。今年初めに、マスク着用には感染予防の効果がないという論文が著名な国際誌に発表されましたが、専門家の間でも賛否があり、どの程度の感染対策を推奨するのかは難しい判断です。

マスク着用については、個人の主体的な



福田 吉治
YOSHIHARU FUKUDA

出身地 大分県

帝京大学大学院 公衆衛生学研究科
研究科長・教授

帝京大学産業環境保健学センター
センター長

PROFILE

【略歴】

平成3年熊本大学医学部卒業。平成10年熊本大学大学院医学研究科修了(社会医学専攻)。国立医療・病院管理研究所(医療政策研究部)、東京医科歯科大学医学部(公衆衛生学講座)、国立保健医療科学院(疫学部)を経て、平成22年に山口大学医学部地域医療学講座教授に就任。平成27年から帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授、平成30年には同研究科長。

【専門分野】

公衆衛生全般。特に健康増進・健康づくり政策・健康教育、社会疫学(健康の社会格差、健康の社会的決定要因)、地域医療・保健・産業保健など。近年では行動経済学で用いられる「ナッジ理論」に基づいて公衆衛生施策を指導。

【学会・委員】

国民健康保険中央会 国保・後期高齢者ヘルスサポート事業運営委員会
国民健康保険団体連合会 保健事業支援・評価委員会委員(東京都・埼玉県)など

【主な著書】

「ナッジを応用した健康づくりガイドブック」
共著 2023年 帝京大学大学院公衆衛生学研究科
「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)からの教訓—これまでの検証と今後への提言」
共著 2021年 大修館書店
「健康行動理論による研究と実践」
共著 2019年 医学書院

他論文多数

選択に任せるというあいまいな政策メッセージでした。『しなくてはいけない』『やらなくてもよい』というメッセージで、『する必要はない』という断定的な言い方ではなかったのは絶妙だったように思います。

3月13日以降もマスクを着用している人がマジョリティでしたが、5類移行後はマスクを着用していない人が多くなっています。これが出版になる頃には、マスクを着用していない人がマジョリティになっているかもしれません。マスク着用以外で、手指消毒、飛沫防止のパーティションの設置、多人数での飲食などについても、コロナ前に近い生活に戻りつつあります。

◆政策的なコロナの収束

この3年間、コロナ対策においては、アドバイザリーボードの委員等の専門家と、政策決定者の間での意見の衝突がありました。両者ともにフラストレーションを抱え、国民もはつきりしない政策やその決定過程に戸惑うことが多くありました。

そして、政策的な収束と言ってよい5類移行と感染対策緩和でも、専門家と政策決定

者が双方納得してではなかったことでしよう。『もう大丈夫みたいだし、この辺にしよう』『もう大丈夫みたいだし、この辺にしよう』のような雰囲気醸成が、その根拠となつたように思います。専門家による強固なエビデンスの提示でも、政治家による英断でもなく、社会全体がなんとなく合意した結果だったのは、白黒つけることをためらう、決められない、日本らしい結末(落としどころ)だったのかもしれない。

ともかく、医療や公衆衛生の現場で闘い続けた方、そして、さまざまな面で苦労された多くの皆様、本当にお疲れさまでした。コロナはまだ予断を許しませんが、アフターコロナの時代が皆さんにとってよい時代になることを心から願っています。

記事提供 社会保険出版社